

【神経障害】

高齢者の脊椎由来の慢性疼痛へのアプローチと薬物療法

KEY WORDS

- 高齢者
- 慢性疼痛
- 脊椎
- 薬物療法

Management of chronic spinal pain of elderly person and pharmacological approach.

Masahiko Shibata (教授)
Yoshiaki Okamoto (部長)

奈良学園大学保健医療学部 柴田 政彦
市立芦屋病院薬剤科 岡本 禎晃

はじめに

日本は平均寿命、高齢者数、高齢化のスピードという3点において、世界一の高齢化社会といえる。総務省が発表した2018年9月時点の推計人口によると、65歳以上の人口は3,557万人となり、総人口に占める割合は28.1%と過去最高を更新し、人口の4人に1人が高齢者となった。慢性疼痛は日常生活動作(activities of daily living: ADL)の低下や介護負担の増加につながり、高齢化社会では今後大きな問題となることが危惧される¹⁾。高齢者の慢性疼痛は、個人だけの問題ではなく社会の問題としてもクローズアップされ、薬物療法を含めた治療や対策はこのような流れのなかでとらえていく必要がある。

I. 病態

まず、見逃してはならない痛みとして、がんの骨転移や化膿性脊椎炎などいわゆるred flagと呼ばれる危険な疾患が原因である場合があげられる。これらの疾患の鑑別法や治療法については他稿に譲るが、診断や治療が遅れることはまれでなく、担当する医師は常にred flagの可能性を念頭に置いて診療することが重要である。

高齢者の脊椎関連の痛みとして頻度が高いのは、変形性脊椎症や腰部脊柱管狭窄症などである。これらの疾患に伴う痛みや行動の改善を目標として治療の選択や方針を考える際、病名分類よりも痛みの病態や痛みの修飾因子に着目したほうが有効な治療につながる場合が多い。痛みの原因となりうる構